



我らがコウくん

Edition2017
(2)

S?kouji

お盆短し休めよ大人

お盆、というものをご存知だろうか。ご先祖様の精霊を迎えるがため過酷な帰省ラッシュに飛び込み、盛夏の日差しと渋滞の極限環境のもと精神の鍛錬を凶るという日本の伝統風習的な行事こなす期間、という辞書的な意味はさておき、そう、言うなれば大人の休日の中でも夏休みプレミアムみたいな位置づけにある勤労感謝デイズのことである。とオレは解釈している。

考えてみればこの期間を休みにするというのは極めて理に適っているもので、夏至も2ヶ月前のこと、立秋も過ぎたというのに秋風なんてそれこそどこ吹く風で、日は短くなりつつあるのに気温だけは後追いで連日のように35℃とか天気予報のオレンジ色の数字をたたき出すこんなときに仕事も勉強もやってられるかっ！てんならいつそ休みにして、クーラー効かせた車の中で10時間くらいゆったりまったり座りたおしつ高速道路の特に高速という部分の定義を問う哲学的な思考にふけるとか、座席も通路も埋まりつくしたCTのデッキ(=乗客が乗降するスペース)やら公衆便所進化系車内トイレ(=CTのトイレは徹底的な予算削減が功を奏し、海外からこれが日本のトイレなのかと慨嘆されるほどの出来映えとなっている)で超速鉄道の旅を満喫するとか、普段できないイベントでも楽しむかという合意が日企連あたりでなされたんじゃないだろうか。いや知らんけど。お盆休みがいつ頃から始まったのか、帰省およびUターンの名で知られる地方行脚がどれほど人々の心身を癒し、お盆の前後でさして変わらない酷暑と立ち向かう力を与えてくれるのかとか。ツッコミどころが多いなまったく。我が相棒に話を振ったところで「そんなの夏アニメがあるからに決まってるじゃん！！」てな無回転パントキックしか返してこないし、今度ミカにでも聞いてみるか。

閑話休題、オレの左腕にある時計の針は先ほどから遅々として進まない。本当は魔法器というのだが、見た目は地味かつ洗練された安っぽさを醸し出す腕時計である。とはいえ、コイツは地味ながらオレたちを魔法使いにしてくれるくらいにはオーバーテクノロジーなシロモノであって、副業の時間表示にも存分に日本国のテクノロジーが活かされており、つまりこの時計が指す時刻は、たとえオレが30分くらいたっただろーと思って5分も進んでいなかったとしても断固として正しい。ストーブの上に座っていると時が経つのは遅い、てなことを仰せられた物理のエライ先生が昔々いたそうで、それはまあ例え話に過ぎなかったんだろうけれど、案外この世界の真理をついてるんじゃないかと今現在実践してしまっているオレは思う。

開け放たれた南向きの窓から吹き込む熱風と入射する直射日光のおかげで汗も乾かぬ湿潤サハラ砂漠と化した教室には、相変わらず我が相棒とオレの2人だけ。おっと歴史の倉茂もいたな。このオッサンは宮澤と違ってテキトーな態度を断固として見逃さないから、コウもとりあえずは愛読の青年誌を出さず机の上にノートおよび教科書シャーペンボールペンを置いて神妙な面持ちで授業を聞いている。ように見えたが放心している。あまりの暑さのために寝ることも出来ないようだ。暑い。机すら熱い。あ～だるいなんて言われてられた頃はまだ幸せだった。

オレがお盆に対する非生産的で非建設的で非進歩的な考察および自問自答を行っていたのは目の

前の授業も同じくらい非生産的なせいであるわけだが、同時に夏休みを利用して魔法都市を脱出し実家でぬくぬくしている学生への訓戒も込めていて、要するにえーと、神、祀、猫と和解せよ？ということをオレは言いたいのだいやそんなわけあるか。この暑さで頭が回るか。ノートに字を書こうたってシャーペンの先がカミとこすれ合ってキシキシいうくらいの湿気だから板書を写すことも叶わない。ボールペンくらい買っときゃ良かった。

そう、今はお盆なのだ。直射日光なんてもうたくさんだ。霊長類ヒト目ヒト科ヒト属ミカサピエンスにより無間補習送りになったオレたちにも、お盆くらい休みを、大人の休日を、もっと蛍光灯ををを。

それにしても流石は“根性の統教連”に所属するだけあって、この熱帯湿潤の中、いつも通りの暑苦しいジェスチャーでハゲシク黒板にチョークを叩き付けながら熱く歴史を語ってくださってしまう倉茂はすごいのかコレたぶんきつとすごいだろう。

「以上のように、我が国はいま非常にヒツィ↑状況に置かれている。ガッ！そんなときだからこそ、そうなってしまった経↓緯↑！を学ぶことで、突破口を見出せるんじゃないかと私は思う。では↑授業カリッ。午後は今の範囲で小テストを行うのでツ(ツ×4)カ復習しておくように！」

キーンコーンカーンコーン。

「あ、ありがとうございました……」

お、終わった、のか。途中記憶がないのはオレは気絶していたのか……？うん、よし。コウ、行こう。ここは人間のいる場所じゃない。壁際の温度計が45℃を指すようなところで人間は生息していけないんだ、って待て待て絶対外より暑いぞこの教室そんなバカな。でも何か考えてる余裕はない。ア-だかウ-だか日本語による表現を超越した母音を発する相棒とともに、オレは廊下へと出て行く。水道の蛇口には相変わらず赤字・手書きで故障中と書かれたペラいA4コピー用紙がセロテープで貼ってある。ああ、そうだあそこに行こう行かねばならぬ。このコンクリ遺跡で唯一、人類の叡智を体現したあの場所へ――。